

史料館だより
第15号
1990・11・30

編集・望月 浩
発行・神戸深江

生活文化史料館

〒658 神戸市東灘区深江本町3-15-17
電話(078) 4531-4980

摂津の考古学から見た東灘(六)

芦屋市教育委員会 森岡 秀人

古墳時代の政治史を通じて地域を理解する上で、前方後円墳や大型古墳の動態をながめることは基礎的かつ重要なことである。今回と次回とは、阪神地方の古墳時代についてかなりマクロ的な目で今考えていることのいくつかを素描してみた。

前方後円墳がなぜ注目されるのか

まず、このことを少し考えてみよう。私は次のような点から、古墳のなかでも前方後円墳はやはり特別視すべき存在だと考えている。

- ①第一、四十数位までの規模トップを占める。
- ②広範な分布範囲をもつ。
- ③極端な分布中枢が判明する。
- ④終末期を除く全時期にまたがる。
- ⑤古墳の要素や副葬品目を先取りする。
- ⑥有力豪族の消長と絡み合う地域が認められる。
- ⑦検討の余地がまだ残されている若干の海外例を除けば、日本列島固有の墳形といえる。
- ⑧築造企画が把握しやすい。

色々と掲げてみたが、この他にも前方後円墳が重要と思われる根拠はある。が、ここではこの八点に

集約しておこう。

①は著名な大山古墳(大阪府堺市・全長四八六メートル)を筆頭にトップクラスの古墳がすべて前方後円墳によって独占されることを言っている。第二位が菅田御廟山古墳(大阪府羽曳野市・全長四二五メートル)であることは周知と思われるが、全長三〇〇メートル代が五基存在することもこの際知って欲しい。上石津ミサンザイ古墳(三六五メートル)、造山古墳(三五〇メートル)、河内大塚山古墳(三三五メートル)、見瀬丸山古墳(三一八メートル)、渋谷向山古墳(三〇二メートル)がそれぞれである。四十番目ぐらになると、さすがに規模が小さくなるけれど、それでも二〇〇メートル近くはある。確かに前方後円墳は古墳の王者なのである。しかし、逆必ずしも真ならずで、一方では全長二〇メートル余の超小型前方後円墳がたくさん実在する事実をけつして忘れてはならない。言い換えれば、規模の階層性がとりわけ著しいのであり、そのことがまた大切な属性といえる。

②は南限が鹿児島県塚崎古墳群にあり、北限が岩

手県角塚古墳にあることを知れば、納得されるであろう。これを大和政権の全国統一として説明する教科書がかつて多数存在したが、墳形が表徴する一つの政治領域を示すことは確かなものの、今はそんな解釈は安易にできない。

③は②と関連して重要である。分布数もさることながら、全長二〇メートル以上の大型前方後円墳にランキングされる実数を比べれば一目瞭然である。奈良県十九基、大阪府十二基、岡山県二基、群馬県一基を数え、他の都道府県には一切存在しないのである。前方後円墳が発達した地域には、明らかに中心がみられる。それは、畿内王権と吉備政権、毛野政権の所在と深く関わっている。ランクを全長一五〇メートルまで下げると、奈良県六基、大阪府五基、岡山県三基、群馬県二基が新たに加わる他、その外の地域でも類例が拾える。京都府の四基、宮崎県の二基、茨城県の二基、兵庫・滋賀・三重・愛知・山梨・宮城の各県の一基などがそれぞれである。兵庫県の一基は言うまでもなく、神戸市五色塚古墳(一九四メートル)である。福岡・山口・香川・岐阜・埼玉・千葉・栃木・福島の各県は、有力な古墳が数多くありそうに見えて、実のところ全長一二〇メートルまでランクを落とさないと該当する前方後円墳を抽出することができない。

一九八九年七月九日、私は佐賀県下の主要古墳を踏査する機会を得たが、県内最大の前方後円墳は佐賀郡大和町の船塚古墳で、全長は一一四メートルであった。また、一九八九年十月八日、学会出席のため富山県を訪れたが、少し大きな前方後円墳を見ようとしても、有磯海への眺望に恵まれた桜谷一号墳

の全長約六二メートルの姿態をおがむにすぎなかつた。この大きさの前方後円墳ならば、私たちの生活圏内でも十分見学することは可能なのである。

④については、前方後円墳の出現をもって古墳時代開始の指標とする風潮が定着してきた。その時期を私は三世紀の第三四半期とらんでいるのだが、以後、古墳そのものと古墳文化をリードした存在となる。前方後円墳の終末―古墳時代の下限の等号は成立しないが、近年、七世紀に入っても前方後円墳を築いている地域が判明していることは注意されたい。

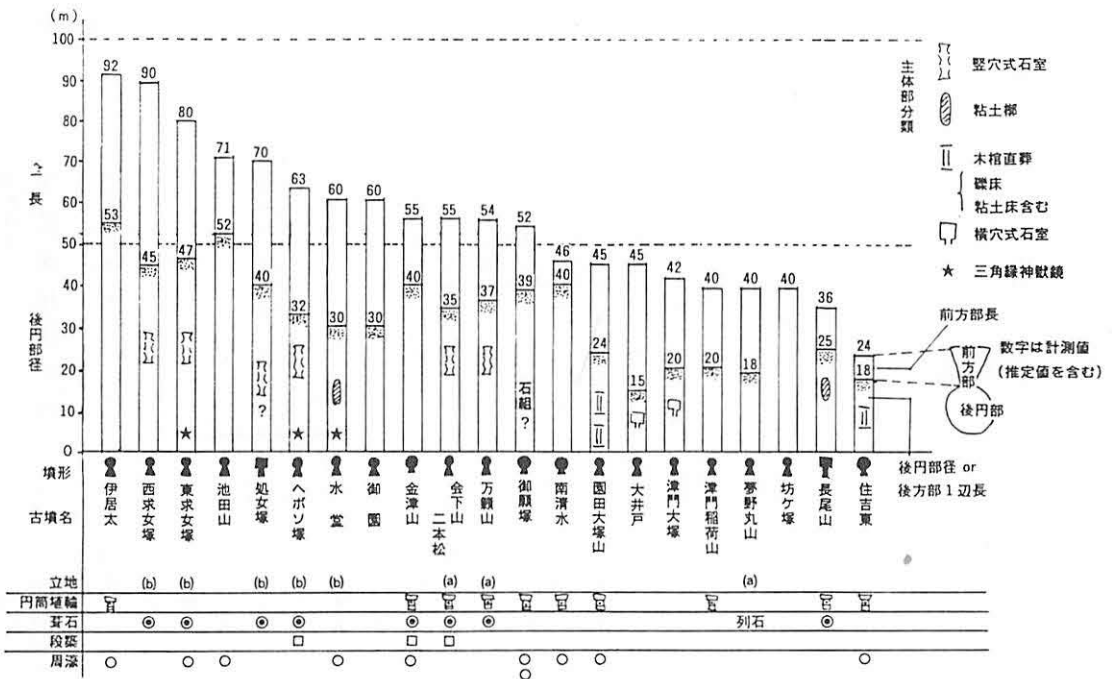
⑤⑧に関しても、一言付しておきたいことがあるが、別の機会に譲りたい。いずれにせよ、全国古墳総数からすれば、ほんの一握りの数でしかない前方後円墳であるが、それゆえ古墳時代の政治動向や地域性を鋭敏に反映することになる。

前方後円の名の由来

前方後円墳は、その特異な形状のため古くから関心が寄せられてきた。

名の起こりは、寛政の三大奇人の一人と言われた蒲生君平にあるとされる。彼の著した『山陵志』には、垂仁天皇から敏達天皇までの二十三陵が取り上げられているが、その中に、「その制をなすや、必ず宮軍に象り、前方後円となさしめ、壇をなすに三成とし、かつ、還らずに溝をもつてす」という一文をみる。

Aはいわゆる「宮車模倣説」と呼ばれる記述で、前方後円墳のモデルを宮車の形態に求める彼の考え方の一端が表徴されている。Bは前方後円墳の立面構造を言ったもので、今日考古学では「段築」とい



第1図 阪神地方の前方後円墳の規模グラフ (1990年6月現在)
 近畿地方には、現在1000基弱の前方後円墳が確認されている。したがって、阪神地方の前方後円墳は2%強のウエイトを占めるにすぎず、その規模もけって大きくはない。和泉地方には、わが国最大の大きさを誇る大山古墳(旧仁徳陵古墳)があるが、その陪冢の前方後円墳(永山古墳)が既に全長100mを測ることを思えば、その規模を越えることのない阪神地方の前方後円墳の性格も少しは察しがつこう。ちなみに、兵庫県下の前方後円墳は、櫃本誠一氏(兵庫県教育委員会)の御教示によれば、1990年9月現在、総数202基を数え、内帆立貝形古墳25基を含むという。

う述語で表現しているものに相当する。「三成」とあるから、三段築成の典型的な前方後円墳を指していることだろう。

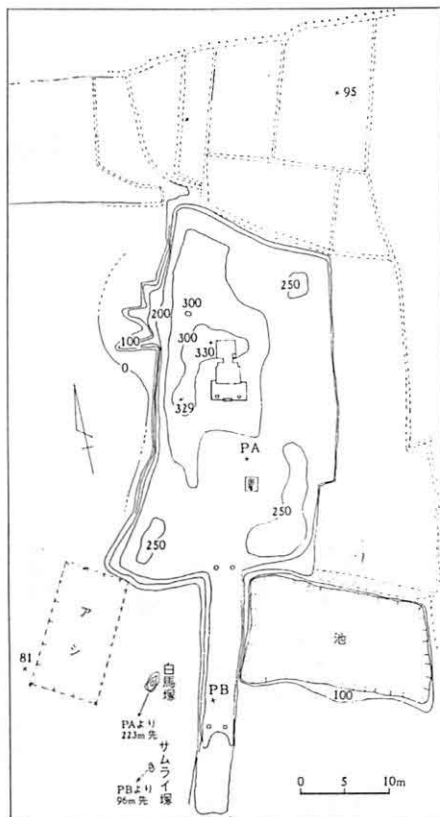
Cは「周濠」をとらえたものであるが、前方後円墳のすべてに周濠が存在するわけではない。畿内地方には比較的多いが、近畿を離れると、とりわけ水濠の遺存は限られている。やはり典型を取り上げたものである。

このように、「前方後円」という用語は、現代の考古学者が実用上考案したものではない。明らかに近世に遡る述語で、むしろそれを考古学の専門用語として踏襲したのである。

阪神地方の前方後円墳の全長順位

話を身近な地域に戻すことにしよう。

第1図を見ていただきたい。手書きの図で恐縮だが、この図は阪神地方の前方後円墳（大阪府域は含まない）のうち、全長の判明するものごとく集成し、長いものから順に棒グラフとして表したも



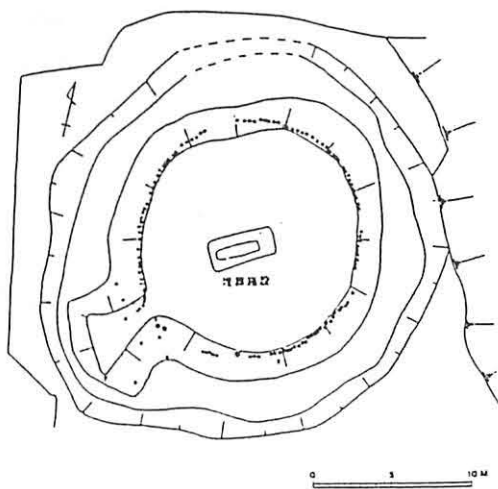
第2図 阪神地方最大の前方後円墳である伊居太古墳（『尼崎市史』第11巻から）

のである。

棒グラフの上の数字は全長を示し、中程の区切りと数字は後円部の直径を示す。全長に対する後円部径の占める割合が視覚的に判るであろう。前方後円墳については、後方部の主軸長を採用している。主体部の判明している古墳については、その分類記号を前方部や後円部の位置に記入している。★印は三角縁神獣鏡の副葬を特別に表したものである。

墳形と古墳名の下には、円筒埴輪・葦石・段築・周濠の有無をそれぞれ記号によって示している。前者は完備された古墳の外部構造三要素であり、その存否を検討することは重要な視点である。しかし、記号のないことが不在を立証し得たことにはならない。発掘調査を経ていない未確認資料が当然含まれるからである。この点、ないことよりも存在することの方を重視していただきたい。

さて、この一覧図には二十一基の古墳を取り上げているが、前期から後期まで全時期のものを含んで



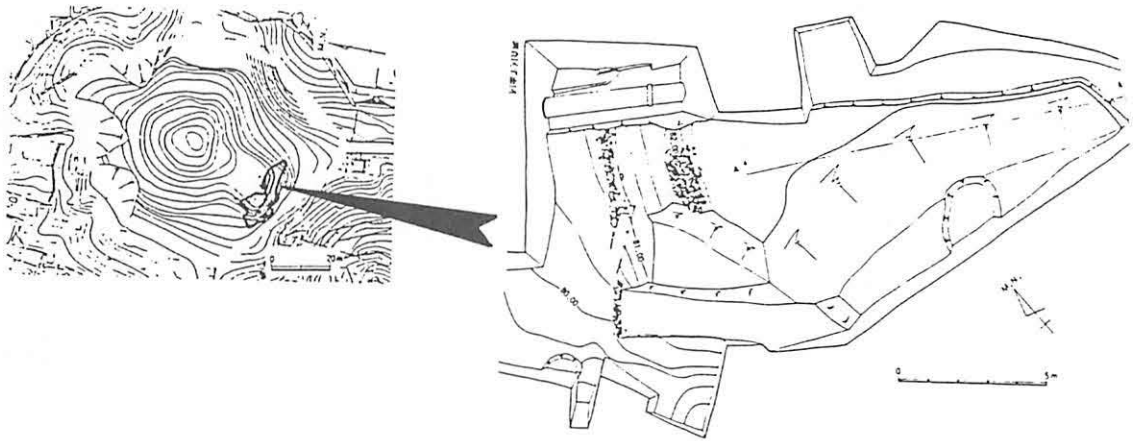
第3図 阪神地方最小の前方後円墳である住吉東古墳（神戸市教育委員会『現地説明会資料』から）

いる。猪名川以東の古墳を割愛したことについては、いくつかの理由がある。また後に触れてみたい。

この表を閲覧して明らかかとおり、この地方最大の前方後円墳は、尼崎市伊居太古墳（九二メートル）である。五世紀末築造と推定されており、猪名川右岸の猪名野・塚口古墳群の最南端に位置して、前方部を南に向けている（第2図）。おそらく、この古墳群の造営系譜中、最大の勢力を誇った首長の墓であろう。その勢力圏はより西方の武庫川水域にまでおよんでいたと公算さえある。

一方、最小の前方後円墳は、神戸市東灘区の住吉東古墳で、全長はわずかに二四メートルを測るにすぎない。六世紀に入ってから築造と推定され、後円部径が一八メートルを占めるいわゆる帆立貝形古墳である（第3図）。住吉宮町一帯では、これまで数多くの方墳群が見出されているが、住吉東古墳はおそらくこれら群集墓の盟主格の古墳とみられてよい。

近年、市街地の発掘調査では、予想もしなかったと



第4図 神戸市会下山二本松古墳における前方部の確認
 (『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』から)



第5図 前方部が発見された芦屋市金津山古墳 (『広報あしや』から)
 矢印の部分が前方部の前端周濠。
 葺石はすべて墳丘からの流入。推定全長55m。

ころから古墳が発見されるケースが増えているが、この古墳もその成果のひとつである。

あとの古墳は、すべて最大・最小のこの二つの前方後円墳の間に収まる全長をもっている。少し整理を企てると、九〇メートル代二基、八〇メートル代一基、七〇メートル代二基、六〇メートル代三基、五〇メートル代四基、四〇メートル代七基、三〇メートル代一基、二〇メートル代一基を数えることになり、四〇〜六〇メートル級の前方後円墳がやたらに多い地域的特性が浮かび上がってくる。

また、六〇メートル代になると、後円部径がおよそ半分程度となり、立体規模が急激に縮小する。数年前、このクラスの前方後円墳が韓国の前方後円墳

との関係で問題となり、私自身も兵庫県教育委員会におられる檀本誠一氏と兵庫県下の実例を再検討したことがある。それは同志社大学の森浩一氏からの要請とお勧めによるものであったが、このランクの前方後円墳を各地へ行ったとき、とくに注意して観察する契機となり、小さなものにこそ眼を向ける貴重な視点が加わったと思っている。

四〇〜五〇メートル代の前方後円墳には、従来、円墳と認識された古墳が目立つ。神戸市兵庫区会下山二本松古墳(第4図)や芦屋市金津山古墳がそのいい例である。いずれも、最近実施された発掘調査で前方部が確認され、従来の見方を改めざるを得なくなった。金津山古墳は、それまで阪神地方最大級

の大型円墳で、県下でも屈指の存在であっただけに、関係者をかなり驚かせた（第5図）。

加えて、このクラスの前方後円墳には帆立貝形のものが多い。伊丹市御願塚古墳や前述した金津山古墳がその代表的存在であるが、尼崎市南清水古墳なども前方部が数メートルしかない短小な古墳である。これら帆立貝形の前方後円墳は、規模の小さい住吉東古墳を含め、五世紀後半〜六世紀前半の限られた期間に営造されている点に特色がある。

帆立貝形の古墳は、正常な発達を拒まれたタイプの前方後円墳である。その出現にはさまざまな理由と背景が考えられているが、ここでは五世紀代、畿内中心部とほど近い西摂地域の前方後円墳が全体として勢力の大きさを誇示できていないこと（数値で示せば、全長一〇〇メートルを越す前方後円墳が実在していないこと）と、関係が深いかもしれない。伊丹の広範な地域にわたって散見される事態には、古墳時代における当地方の一つの政情が反映されているように思う。

全長四〇メートル代の前方後円墳は、古墳時代後期に築造されたものが多い（園田大塚山古墳・大井戸古墳・津門大塚古墳・津門稲荷山古墳）。規模の不明な西宮市上ヶ原車塚古墳も六世紀に営まれた前方後円墳で、おそらくこのクラスのものであろう。

尼崎市園田大塚山古墳は、別名天狗塚とも呼ばれる六世紀前半に造営された前方後円墳で、横穴式石室を採用していない前方後円墳としては、この地方では最も新しい。猪名野・塚口古墳群に属し、伊居太古墳とは逆に前方部を北の方角に向けている。尼

崎市大井戸古墳は、昭和四一年、尼崎市教育委員会の発掘調査によって横穴式石室の内蔵が確認されたと聞く。もし、それが正しいなら、横穴式石室を導入した前方後円墳の展開を考える上に重要な位置を占める。園田大塚山古墳は最末期の円筒埴輪をもち、大井戸古墳では埴輪は確認されていない。

一方、上ヶ原車塚古墳や津門大塚古墳は、古記録を総合すると、横穴式石室を内部主体にしていたことが推定できる。津門稲荷山古墳は周辺で円筒埴輪片が採集されており、この二つの前方後円墳より古い要素がみられる。五世紀末に遡る可能性はあるだろう。

前期古墳に認められる二つの相

前方後円墳の存在自体は、畿内政権との大枠での結びつきを表現しているかもしれないが、その勢力圏の伸張は当初から面的なものではなかったはずである。その中枢地に近接する阪神地方にあっても、三世紀末〜四世紀段階の政治勢力地図は複雑であった。

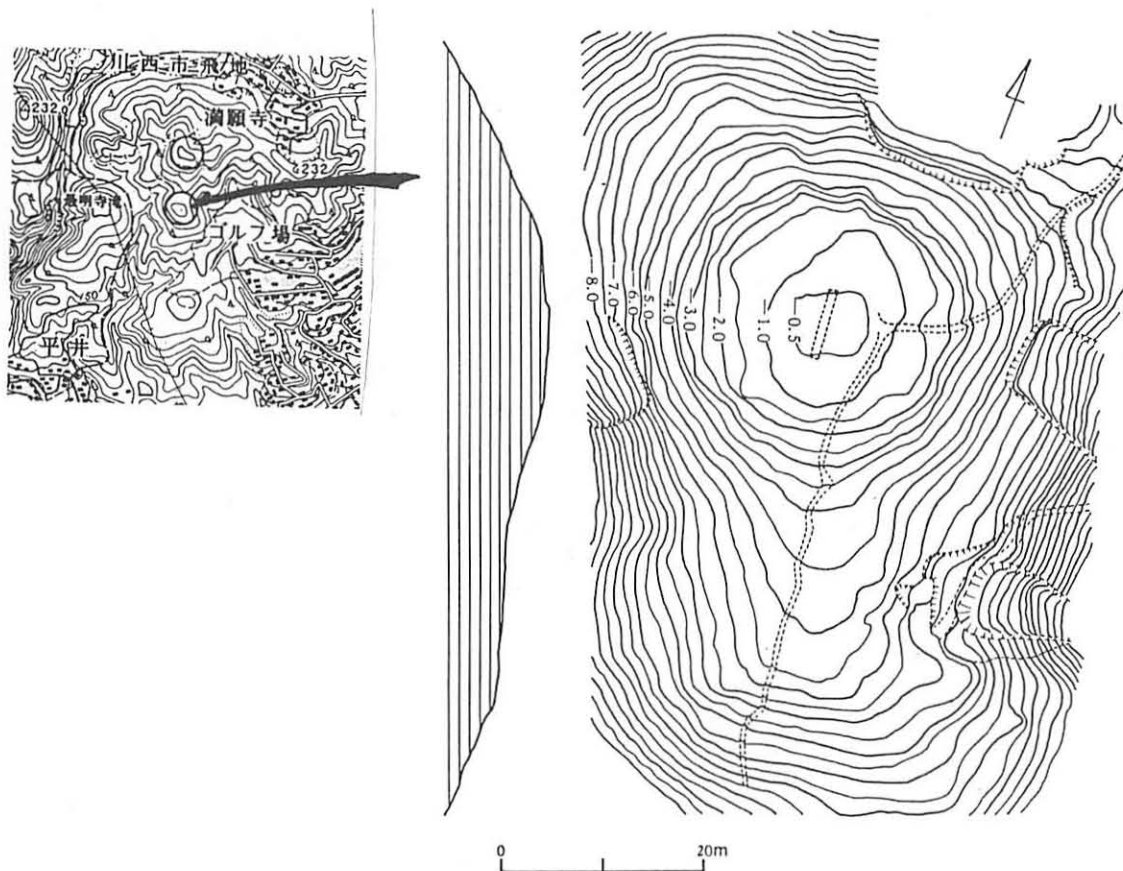
三角縁神獣鏡を副葬する政権傘下型の前期古墳は、海岸部に立地しており（神戸市東灘区東求女塚古墳・へぼソ塚古墳・芦屋市阿保親王塚古墳・尼崎市水堂古墳）、けっして面的な広がりを見せてはいない。大阪湾北岸の海浜部の交通ルートにあたかも掌握するかのようには、点的緑的配置を採っている。おそらく、これら諸古墳の被葬者たちは在地に有力な生産基盤を保持していなかったものと思われる。阿保親王塚古墳は現状では径三二メートル程の円墳であるが、前方後円墳の可能性を捨てきれない。江戸時代以降、たび重なる改修による改変を受け、現在、

宮内庁書陵部が管理するところとなっているからである。水堂古墳は三角縁神獣鏡の外区文様が波文帯であることや主体部構造・副葬品目からみて、かなり年代が下降するであろう（第6図）。

一方、六甲山地南斜面や西摂平野北辺の長尾山山塊には、山稜性の前期古墳が数多く営まれている（神戸市得能山古墳・会下山二本松古墳・夢野丸山古墳・宝塚市万籟山古墳など）。大阪府域になるけれど、池田市池田茶白山古墳や同市娯三堂古墳なども同列に扱える古墳で、円墳が結構多いし、前方後円墳の形制を採っても、埴輪や平面形が不明瞭であったり、段築・葦石・円筒埴輪・周濠といった要素を欠くものが目立っている。さらに重視すべき点は、現時点において三角縁神獣鏡の副葬が確認できないことである。中央との結びつきは鏡の面でも希薄なのである。さらに加うるに、これら山稜性の前期古墳の一部には、堅穴式石室の棺床構造に強い地域性が看取さ



第6図 尼崎市水堂古墳出土の三角縁神獣鏡
（『尼崎市史』第11巻から）



第7図 宝塚市万籟山古墳の立地と墳丘図

(『宝塚市史』第4巻から、墳丘実測—武庫川女子大学考古学研究会)

私はこの古墳を3度ばかり訪ねているが、竪穴式石室の内部に立ち入ることができたのは、1970年の秋、松本修一・橋高和明・関川尚功の3氏と見学した時のみである。11枚存在する天井石の北端の1枚を取りはずし、壁体や粘土層を観察できたが、今はそれができなくなっているという。

れ、畿内中枢の勢力とはまだ強固な同盟関係を結んでいない摂津在地の首長層の存在を教えてくれている。

以上の素描で明らかのように、阪神地方の前期古墳には、政権勢力側と在地勢力側の二相の首長が葬られており、六甲山地東部前脈に山陵立地タイプの前期古墳が発見されていない現状からすれば、大和に本拠地をおいたとみていい畿内政権の西摂地域における拠点的な進出地が神戸市灘区から東灘区、芦屋市にかけての領域とみる推測も生まれてこよう。

この地域は、神戸市灘区桜ヶ丘の銅鐸一括集中埋納地からかつて考えたように、弥生時代中期末段階にあっても、畿内文化の西辺をなしたところで、地理的にみて肝要な場所である。これにひきかえ、この地を避けた在地首長の一群は、埋葬施設として竪穴式石室を採用しつつも、部分構造では手を抜く手法も使っており、眺望の良好な高所に盛土という観点でも省力的な墳丘を築き、外部構造もけっして完備されたものとはいえない(第7図)。もし仮に、立地点に有意な面を見出すならば、首長の直接治めた支配領域を眼下におさめることが可能な高みの地をあえて選んだと説明することは許されよう。

畿内の政権中枢は、かように近傍の阪神地方でさえ、四世紀の段階では面的な支配権をふるうことがままならなかったのである。そこに大和に本拠地を置く政治的結合体の脆弱な側面を垣間見ることができよう。

(つづく)

西岡本遺跡発掘調査中間概要 3

六甲山麓遺跡調査会

一、はじめに

西岡本遺跡は、一九八九年十二月に一年間におよぶ発掘調査が終了し、縄文時代から現代にいたる数々の遺構・遺物を検出し、大きな成果をあげた。調査期間中に明らかになった主な成果は、前回までに二度にわたって報告したところであるが、今回はその後の成果のいくつかをとりあげることにする。

二、弥生時代の住居址(図1)

弥生時代の住居址は八九年十一月四日の現地説明会もおわり、発掘調査が終盤に近づいたところ、4号墳の封土(古墳の盛り土)下から発見された。住居の形態は竪穴住居で、一部後世に破壊をうけていたが、住居址の西側三分の一を発掘した。住居址には二本の周溝が同心円状にめぐり、小さい建物から大きい建物へ建てかえられていた。小さい住居址の復元径は四・七m、大きい方の復元径は六・一mをはかる。

住居址にともなう遺物は、口縁部が欠けた土器一点と、よく使いこなされた磨製石斧一点があり、いずれも大きい住居の周溝上に隣合った状態に置かれていた。土器は発掘されたとき、横倒しの状態であったが、元は立てられていたものと思われる。

土器の形から住居址の時期は、弥生時代後期に考えられる。

三、野寄群集墳

古墳は十三基を確認・発掘した。構成は方墳が二基(10・12号墳)で、残り十一基は円墳と思われる。埋葬主体部である石室はそのうち十基から発掘した。すべて横穴式石室である。II区から発掘した1・2号墳の二基の古墳は本誌十二号で報告したが、野寄群集墳の概要を一覧にしたのが表1である。

方墳である10号墳と12号墳とは、東西に相接して並んでおり、その周溝の一边は共有するようにつくられていた。しかし、10号墳は南側の大部分が削平されて北側の周溝三分の一程が残っていた程度であり、12号墳は発掘調査区外になるため、その埋葬主体部は不明である。

ところで、10・12号墳の周溝には上下二層に土砂が堆積しており、この古墳に使われていたと思われる遺物が周溝の上層から確認された。10号墳からは多量の埴輪が出土し、12号墳西側の周溝からは須恵器の甕の一群が出土した。この埴輪と須恵器は、10号墳と12号墳が周溝を共有するところでは周溝の中央で一線を画するような状況で検出された。あたかも埴輪が10号墳に、須恵器は12号墳に所属するかのごとく。これは10号墳に埴輪が、12号墳に須恵器がともなっていた結果だと考えられる。

埴輪には家形・盾形・朝顔形・円筒形の四種類があり、円筒埴輪はさらにその表面に施されたハケ目

が粗いものと細かいものと二種類に分けられる。また、埴輪の質は陶質のものと、土師質のものと二通りに分けられる。10号墳の墳丘上にはこのような埴輪がめぐらされていたのであろう。

石室の形態は、その全容を知りうるものが六基ある。内訳は、遺体を安置する玄室とその通路にあたる羨道とが区分された有袖式のもの二基(3・5号墳)、その区分のない無袖式のもの四基(1・2・4・9号墳)をかぞえる。不明四基についても石室幅が一m前後と狭く無袖式に近い数値を示すところから、無袖式のものが大多数を占めていたと考えられる。

つぎに野寄群集墳が営まれていた時期についてみてみよう。石室内には埋葬された人に添えられた須



弥生時代の竪穴住居址

<表1> 古墳一覽表

号墳	石室長さ	石室幅	形態	出土遺物	備考
1	4.2m	1m	無袖	須恵器 釘 棺台	単体埋葬
2	4.2m	1m	無袖	須恵器 釘 足骨	単体埋葬
3	玄室 4m 羨道 2.1m	2.2m	両袖?	須恵器 釘	半壊 複数埋葬か
4	5.2m	1m	無袖	須恵・土師器	半壊
5	玄室 2.6m 羨道 1m	1.2m	右片袖	須恵器 釘 歯	単体埋葬
6	2.7m	1m		金環 釘 歯 棺台	半壊 複数埋葬
7	1.4m	1.1m		金環 釘 棺台	半壊 単体埋葬か
8	1m	0.8m		須恵器 棺台	奥壁部残存 単体埋葬か
9	5.5m	0.8~ 0.9m	無袖	須恵器 剣? 釘	石抜き取り 複数埋葬か
10	一辺 5.7m	周溝幅 1.1m		埴輪	方墳
11	4m	1m		須恵器 棺台	半壊
12	一辺 9m	周溝幅 1m		須恵器	方墳
13	周溝・封土の一部を検出				調査区外

恵器や土師器、金環などの副葬品があり、これらの遺物から、多くの古墳が古墳時代後期の六世紀後半から七世紀初頭につくられていた。しかし、10・12号墳は出土遺物から古く位置付けられ、五世紀末から六世紀初頭に当てることができる。それぞれの細かい検討はできていないが、野寄群集墳は五世紀末ごろから七世紀初頭にかけて営まれ、大きく四つの段階に分けられよう。

◇野寄群集墳の変遷(数字は古墳の号数を示す。カッコ内の数字の配列は古墳建造の順番を表さな

い。)

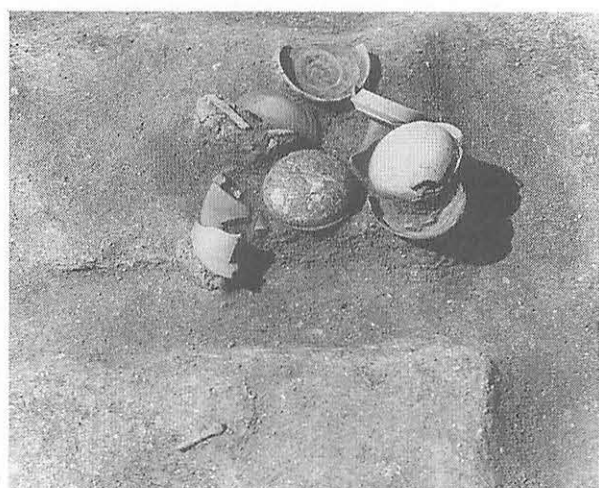
① 五世紀末〜六世紀初……(10・12)

② 六世紀後半………(3・5)
③ 六世紀末………(1・2・8・9)

④ 七世紀初………(4・6・7・11)

四、掘立柱建物跡および建物関連遺構

前号の地区割のところの説明したように、当該地は標高七四mから八〇mの間に大きく四段の段差がついている。この段差はもとから自然にあったものではなく、古墳がつくり続けられていたときはまだ段差のないならかな斜面が形成されていた。それ



9号墳副葬品(須恵器)出土状況

が、古墳がつくられなくなってから新たな土地利用が始まって、平地をつくるために削平されたり、盛土されたりして最終的に四段の段差ができあがったのである。そのため、I区から発掘したすべての古墳の埋葬主体部は、全部または一部が破壊されており、その全容を知りうるものは少ない。

こうした土地の改変が始まったのは、平安時代後半からで、一部は田圃として耕され、あるところには建物などが建てられた。その建物が建てられていた地区のひとつにI区西地区中段(標高七八m)とした区域がある。この地区から建物の柱を埋め込んだピット(柱穴)が多数検出された。ピットの大きさは直径二〇〜三〇cmで、上下二層に掘立柱建物跡を確認した。これを①上層の掘立柱建物跡と②下層



4号墳石室全景

の掘立柱建物跡としよう。この上層の掘立柱建物跡の南東には堅穴遺構の周囲に柱穴を持つ建物がある。これを③周囲に柱穴をもつ堅穴遺構と呼ぼう。また、上段（標高七九m）からは建物に関連すると思われる溝が検出されている。この溝の片側には石積みがなされており、石積みのある方に建物が建てていたものと思われる。これを④片方に石積みをもつ溝状遺構と呼んでおこう。さらに、下段の東端からは⑤石垣状の遺構の一部がみつかり、そこに瓦や陶磁器などが投棄されていた。その状況から建物にもなった施設と考えられる。つぎに①～⑤の番号を付したそれぞれの遺構について概要を記しておく。

① 上層の掘立柱建物跡

調査地区の西に偏って一〇m四方の範囲にピット群があり、そのうち七・五m四方に建物が立つようにピットの配列が見られる。しかし今一つピットの組合せが判然とせず、検討中であるが、東西三間×南北四間（七・五m×九m）と三間×五間（六・七m×十m）の二棟の建物が建ちそうである。しかし、それらはがっちりした建物ではなく、作業小屋程度の簡単なものであったと思われる。

ところで、このピット群の東南東一〇mに4号墳があるが、4号墳の石室は幅一m、残存長さ五・二mであるが、その東側が大きく掘りこまれ、石室の天井石もはずされ、石室の空間も含めたその穴には、花崗岩をはつたときにできる石屑などが投棄されていた。

ちょうどこの地域は花崗岩の産地として有名で、このあたりから切り出された石は「御影石」と呼ばれ、花崗岩の代名詞にもなっているほどである。山から切り出された石はふもとの作業場まで運ばれ、そこで目的に応じて手を加えられ、搬出された。その際、多量の石屑ができる。この石屑などを処理したのが、前述した古墳石室とその東側に掘られたごみ捨て穴であろう。このことから、この場所にも「石工」の作業場があったことが想像される。

石室に捨てられていた石屑は、石室の西側すなわちピット群がある方から掘り込まれており、石室の西側に作業場があったと考えられる。とすれば、石室から一〇mの空間（広場）を隔ててあるピット群が石工の作業施設に結びつかないであろうか。このピット群が作業小屋などの建物になるならば、作業小屋の前に切りだした石を安置する広場、そしてそ

の前に石屑などを捨てる場所といった有機的に結びついた広がりが見定できる。

② 下層の掘立柱建物跡

4号墳のすぐ北側から見つかった一間×二間もしくは二間四方の建物である。というのは、北側と西側の柱通りが二間ずつ確認できたのに対し、東側の柱通りは南端と真ん中の二本の柱穴を確認できなかったため、確定できないからである。一間×二間の柱穴はすべて揃っており、確実には一間×二間の建物建っていたのであろう。

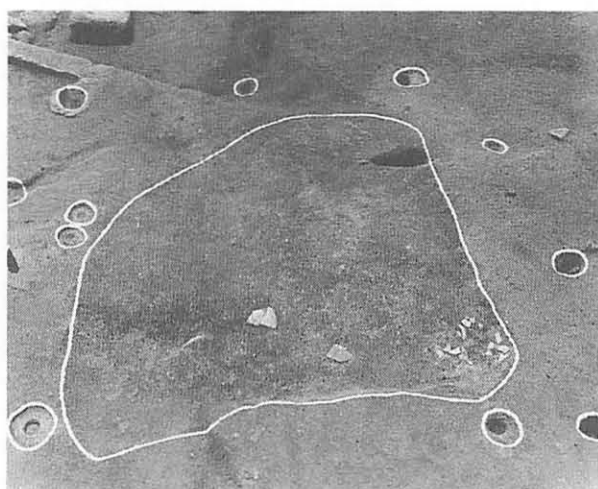
柱穴の大きさは直径二五cm程で、柱の太さは一〇cm程である。方位は真北に対して二五度西に振っている。

③ 周囲に柱穴をもつ堅穴建物跡

上層の掘立柱建物跡の南東三mのところにある建物跡である。三m四方の堅穴遺構の四隅外側に、堅穴遺構を囲むように柱穴をもつ。堅穴遺構の南側は削平されていて、その全容は不明である。柱穴の直径は二五～三〇cmをはかり、間隔は一間四方で、東西三m、南北三・三mである。堅穴遺構からは土師質土器の土鍋と須恵質の捏ね鉢などが出土した。

この建物跡は4号墳の西側に接しており、これをつくるにあたって建物の東側三・五mと南側六mにわたって地形（整地）が行なわれていた。その地形とは、東側は4号墳の墳丘との境を画するための石積みが三段に積まれ、南側は建物から一m余りのところに一～二段の土留め石が積まれ、整地されていたのである。

この建物の時代は室町時代中頃（中世）と考えられる。



周囲に柱穴をもつ堅穴遺構

④ 片方に石積みをもつ溝状遺跡

I区西地区上段から南北にはしる幅一・七m、深さ三〇cmの溝状遺構を発掘した。この溝の西側の法面には二〇〜五〇cm大の石が張りつけられていた。石の張りつけは片面のみで、石の張りついているほうが内側になるものと思われる。建物あるいは宅地を取り巻く溝の一部であろうか。

⑤ 石垣状の遺構

I区西地区下段の東端において石垣状の遺構を確認した。発掘面積の都合上ごく一部しか発掘できなかったため、その規模などはわからない。高さは八五cmで三段にほぼ垂直に石が積まれてあり、石垣の下には深さ一〇cm、幅一〇cm程の溝が細長い石でもってつくられていた。石垣は東側を表に組まれてあ

った。石垣を埋めた土砂には瓦や陶磁器が多量に含まれていた。これらのものは江戸時代後半のもので、瓦類が多量に投棄されていたことから石垣の内側には瓦葺の建物が建てられていたものと推定される。

この石垣遺構の東側にはII区で検出した水車関係の遺構があり、SD-1の水車に取付く樋がこれに平行に架けられていたようで、野寄大山田水車に關連した建物であったことも考えられる。生活に關係した遺物が出土していることから、水車を管理していた人の建物かもしれない。

五、おわりに

西岡本遺跡の発掘調査はちょうど一年を費やして終了し、その間三回にわたって主な遺構の概要を連載してきた。その内容は調査の進行にもなつて報告する方法をとつたため、時代順に並べるとも、書き方を統一することもできず、煩雑になつた点はお許し願いたい。最後に西岡本遺跡の変遷を簡単に眺めて締めくくりにした。

住吉川の兩岸には非常に発達した扇状地が開け、きれいな同心円状の等高線が弧を描いている。西岡本遺跡はこの扇状地の最高位に位置し、パノラマ状に展開する大阪湾の展望を目前にした住環境に最適な場所である。人類が自然の洞窟や岩陰を利用した住居から脱し、自らの手で大地に働きかけて住居をつくるようになってからは、それぞれの時代に適した住環境に集落を営むようになる。いまだ生産経済に移行しない縄文時代にあつては、自然のめぐみを糧として野山や海川の狩猟・採集・漁労に適し、外敵からも守れる場所が選定された。そういう意味において西岡本遺跡は非常によい地の利を得ていたの

であろう。

西岡本遺跡はいまから八千年程前の縄文時代早期に集落が営まれるようになる。ここに住みついた縄文人は、野山に兎や猪・鹿を追いかけ、木の実を採って生活していた。石の矢尻（石鏃）や木の実を潰したと思われる石皿などの出土品がそのことを物語つていよう。今回の調査ではそれ以前に人類が何らかの営みを行なっていたかは確かめられなかったが、縄文時代早期以後連続と現在まで人類の営みが続けられたことがわかった。その営みは時代によつて異なり、あるときは集落や建物が築かれ、あるときは古墳がつくられ、あるときは田畑が耕されたりした。

しかし、縄文時代から弥生時代、そして古墳時代前期にかけて連続的にここに集落が営まれたのかは、今回の調査では確かめられなかった。というのは縄文時代・弥生時代・古墳時代前期の生活面である遺物を包含する土層が残っていないかつたためである。それが人為的な削平によるものなのか、流失によるものなのかかわからないが、遺物包含層とともに遺構がまったくといってよい程失われていた。かろうじて縄文時代早期と弥生時代後期の住居跡の一部が残っていたため、近畿地方ではめずらしい縄文早期の住居跡を発掘することができた。また、古墳時代前期の遺構はまったく確認できなかったが、後期の古墳の封土（盛り土）から前期の土器が見つかつており、古墳時代前期にも生活のあとがあつたことが考えられる。

古墳時代後期になると様相は一変し、生活の場である集落から奥津城（おくつき）として古墳が築か

れるようになる。発掘調査で確認できただけで十三基、聞き取りによる数基を加えて十六、七基以上の古墳がつくられていたようである。神戸地域の六甲山南麓には群集墳が数多く営まれていたといわれていたのであるが、はじめてその実態にメスを入れることができた意義は大きい。古墳は六世紀後半から七世紀初頭にかけて盛んにつくられたため、次の奈良時代にはここは奥津城として手はつけられなかったのか、奈良時代の遺構・遺物はみられない。

次に人類が積極的に働きかけを行なう段階は、平安時代後半になってからである。大がかりな整地が行なわれ、古墳の破壊が始まるようである。整地は雑壇状に行なわれ、一部に水田化が見られるが、庶民にはあまり縁のない緑釉陶器がかなり出土するところから貴族的性格の強い建物などが建てられていたことも考えられる。その具体的な遺構は確認できなかったが、I区西地区上段から検出した片方に石積みをもつ溝状遺構がこれにあたるかもしれない。中世になると、周囲に柱穴をもつ竪穴住居や掘立柱建物などが立てられるようになり、中世の終わりに石工の作業場がつくられたようである。

江戸時代には六甲山南麓で水車産業が始まる。その最初は野寄で操業を開始したといわれている。灯火用の油を絞るために操業を開始した水車は灘五郷の地に規模を拡大し、江戸時代後期には酒造用の精米も加わり、最盛時には三百両近い水車が稼働していたという。灘の酒が日本一となった原動力は、この水車力による精米にあったことを忘れてはならない。西岡本遺跡から見つかった野寄大山田水車は炭化して残っていた種子鑑定の結果、綿実油を絞って

おり、油車として操業していたことがわかった。しかし、明治末ここに異人館が建てられるにおよんで、水車の位置も東側に移動し、酒造用の水車に転化を図ったようである。

明治に入ると文明開化とともに神戸は国際港として開かれ、西洋人が居留し、異人館や西洋風建築を取り入れた洋館が数多く建てられた。明治の終わりにはその範囲は東灘にも拡がり、いくつかの著名な建物が十数年前までは見ることができた。しかし、いまはまったく姿を消してしまっている。その一つにブレン（シュネル）邸がある。この異人館は東西二六m、南北一六mの

建物で、建坪は二二〇㎡あまりの木造二階建てであった。明治末ドイツ人ブレン氏によって建立され、その後日本人の手を経て昭和のはじめドイツ人シュネル氏にわたりシュネル氏が亡くなるまで使われた。その期間は半世紀あまりにわたる。敷地は、建物のある上段と庭の下段に分かれ、一段低い南側の敷地には遊歩道でつながれ、滝と池が配された庭園がつくられていた。また、庭先には石で組まれた

五頭の犬の墓が並んでいた。これはシュネル氏が大変な犬好きであったことで解決したが、西洋人のペットに対する心配りを肌で感じる事ができた。いま西岡本遺跡は、土地ブームの中で新しい開発が行なわれようとしている。より現代的なものへ変わってゆく西岡本遺跡は、その大地のペールを一枚はがすことによって一万年の歴史を見てゆくことができた。一万年の歴史を一つ一つ手繰っていくことのできる遺跡を発掘できた喜びを、いま私たちは大いにかみしめているところである。

（文責 浅岡俊夫）

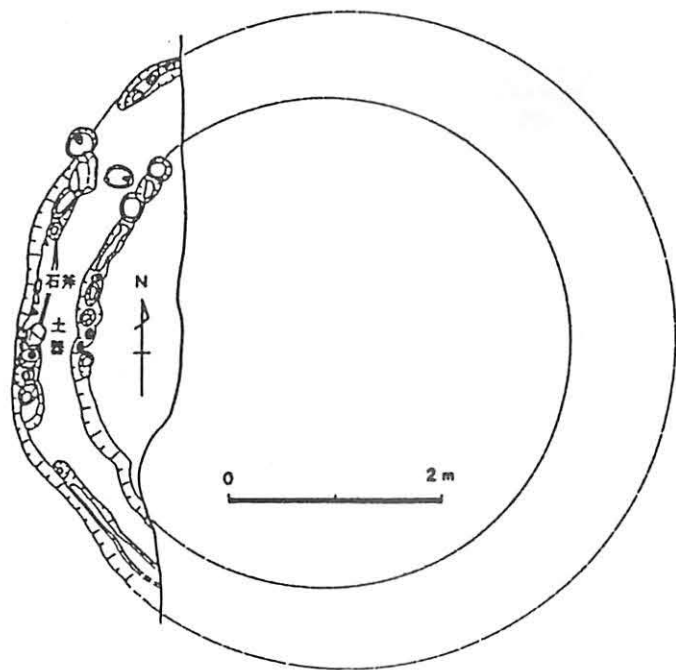


図1 弥生時代の住居址（実測図）

◇編者から◇

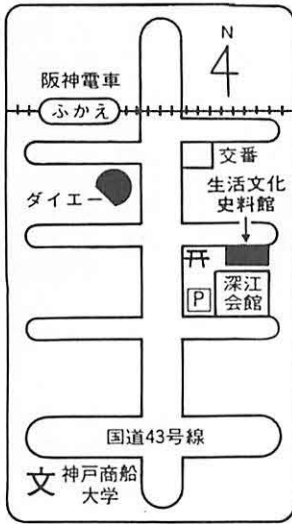
☆今号は、考古関係の二文章だけの掲載となりましたが、いずれも東神戸の古代史のページを解明する貴重な一文です。

☆来年は、史料館も十年をむかえます。これまでの着実な歩みをさらに続けていきたいと思えます。みなさまのご協力をお願いします。

☆本年度の特別展「ザ・ひがしなだ」展も好評のうちを終了しました。関係者各位のご協力に感謝します。

☆編集の都合上、次回に回させていただいた原稿があります。藤川祐作研究員の「神戸女子薬科大学構内古墳三」です。お楽しみに。

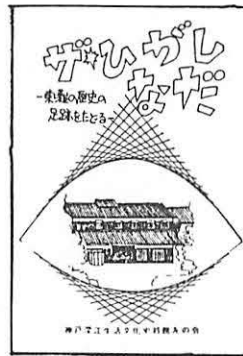
☆史料館では、今後も充実した活動を続けていきたいと思えます。みなさんのなかでいっしょに活動をしていきたいと思われる方がおられましたら、お気軽に声をかけてください。お願いします。



研修会への館員派遣

- H元. 11. 21
 元年度 博物館協会 第2回研修会
 見学会 白毫寺・興禅寺・大国寺
 春日町歴史民俗資料館
 郷土資料館
 (派遣館員 研究員 道谷 卓)
- H2. 7. 21
 2年度 博物館協会総会・研修会
 総会 事業決算報告・役員改選
 ・事業予算計画
 見学 特別展「願い かなえ たまえー古代人の呪術と信仰ー」
 (派遣館員 主任研究員 望月浩
 ・研究員 道谷卓)

『ザ・ひがしなだ』好評発売中



東灘区発足40周年を記念して、史料館友の会から東灘の史跡や町名の由来を、1冊の本としてまとめ、発刊しました。

東灘の歴史を知り、身近な史跡巡りにかせない小冊子です。

史料館・インフォメーションこうべで、1冊300円で発売しています。

【協力団体】

- 神戸市教育委員会／神戸市観光課／芦の芽グループ
- 芦屋市教育委員会／国立神戸商船大学／東灘区役所
- 日本玩具博物館／御影高校地歴部／本庄五校園
- 神戸史学会／深江青少年協議会／サンテレビ
- 東灘文化センター／大丸百貨店
- 深江ショッピングセンター／明石市立天文科学館

【史料館員・役員】

- 理 事：磯辺 信三／大国 正美／太田垣正雄
 小嶋 悦廊／坂上和三郎／志井 正夫
 志井 保治／杉浦 昭典／田辺 真人
 松尾 福夫／深山 健二
- 館長代行：..... 大国 正美
 事務局主事：..... 阿部 英子
 主任研究員：..... 望月 浩
 研究員：伊東 玲子／下久保恵子／田部美知雄
 藤川 祐作／道谷 卓／望月 友二
 山本 文雄
- 調査員：大塚 康弘／西村 敦
 事務局員：..... 中島 薫
 友の会幹事：小嶋 悦廊／志井 保治／寺岡 一夫
 門前 喜康／吉川 永子／磯辺 信三
 (以上常任)
- 大川 弘／佐野 末夫／佐原 浩平
 清水 久雄／多田 康治／田辺ゆかり
 納多 春雄